広告　企画・制作　読売新聞社広告局

世界に輝く日本 私たちの力で

読売中高生新聞 ティーン未来フォーラム2014

次代を担う高校生が日本の未来について提言する「ティーン未来フォーラム2014」が昨年12月26日、東京・大手町の「よみうり大手町ホール」で開かれた。中高生やその保護者、学校関係者などに日本の将来を考えるきっかけにしてもらうのが狙い。フォーラムでは、三菱商事が海外展開するプロジェクト現場を訪問する「海外プロジェクト探検隊」11期生に選ばれた高校生8人が、ツアーで学び、考えたそれぞれの「提言」を同世代に向けて発信した。

海外で学び、自分たちで考えた「提言」を発表する高校生たち（よみうり大手町ホールで）

三菱商事の最前線取材体験から
高校生が同世代へ提言

フォーラムでは、三菱商事の廣田康人・常務執行役員＝写真＝が「8人のティーン特派員がビジネスの最前線の熱気を感じ、考えた、日本のあるべき姿への素直なメッセージを楽しみにしている。会場の皆様も、彼らの提言を聞いて、日本の未来に思いをはせていただけたらと思っている」とあいさつした。

その後、数学者で大道芸人のピーター・フランクルさんが基調講演し、「たとえ英語ができても国際人になれるわけではない。民族や国籍、宗教などが異なる人と出会ったときに、心を開く『寛容さ』が大切だ。心の門を開き、旺盛な好奇心を持ってほしい」と呼びかけた。

続いて、読売中高生新聞の「ティーン特派員」に選ばれた海外プロジェクト探検隊の高校生8人が、昨年8月にシンガポールとマレーシアで三菱商事が展開するビジネスの最前線を取材している様子を映像で紹介。その後、8人が帰国後、数か月にわたって議論を重ねてとどい着いた提言を披露した。

提言は、「資源・エネルギー」「日本式ビジネス」「多文化・多民族共生」「日本の発信力」と幅広い分野に及んだ。10代の研ぎ澄まされた感覚で発信されたフレッシュな提言を、会場を埋め尽くした同世代の学生ら数百人の来場者は、メモを取るなどして熱心に聞き入っていた。

提言「日本のエネルギーの安定供給と新エネルギー開発について理解を深めよう」

大妻高校
黒川 瞭子

東日本大震災後、全国の原子力発電所は稼動を停止していますが、現在、電力は安定供給されています。それは、私たちが訪れたマレーシア・ビンツルの液化天然ガス（LNG）プラントで生産された天然ガスなど、世界から供給された天然ガスによる発電が、不足分を補っているからです。遠い国で生産される天然ガスが、私たちの生活を支えていることを目の当たりにして、日本の将来を担う私たちの世代が、エネルギーについて無関心でいることは許されないと感じました。

海陽学園
海陽中等教育学校
矢崎 佑磨

資源に乏しい日本が経済力を維持するには、エネルギーの安定供給が重要です。そのため、日本近海に存在が確認されているメタンハイドレート（天然ガスの一種）など、新エネルギー開発を進めて供給チャンネルの多角化を図る。そして、量的・価格的に安定したエネルギーを外国から安定的に確保し、新エネルギー開発の主導権を握ることが重要です。

提言「世界を明るくする日本式ビジネスを目指そう」

渋谷教育学園
渋谷高校
綾井 祐介

三菱商事のような「総合商社」は、世界に類を見ない日本独特の形態です。貿易だけではなく、事業投資も行い、産業の「川上」から「川下」、つまり商品の生産から販売まで幅広く関与する「バリューチェーン」を築いて付加価値を生み出しています。海外では雇用の創出などにも貢献しています。信頼や きめ細かさなど、日本人の美徳をいかしたビジネスが世界に受け入れられているのだと考えます。

横浜市立
横浜サイエンス
フロンティア高校
一ノ瀬 智裕

将来、私たちの世代全員が海外とのビジネスを行うわけではないですが、グローバル化の時代で、外国人との接点は増え、日常的な交流が生まれます。一人一人が、「日本人は信頼できる」といった良い印象を外国人に与えれば、小さいけれど、日本の活路を開いていく確実な一歩となるはずです。自分の「ブランド力」を磨き、外国との草の根の交流を重視することが、我々にもでき、世界を明るくする「日本式ビジネス」の始まりではないでしょうか。

提言「世界の文化・民族の多様性に敬意を払おう」

桐蔭学園
中等教育学校
真坂 卓実

マレーシアで液化天然ガスのプラントを見学した際、働いている様々な人種の人たちの間で、積極的な「対話」が行われていることを肌で感じました。

例えば、イスラム教徒が多いことに配慮して、施設内に小さなモスク（イスラム教礼拝所）が設置されるなど、多民族の労働者が気持ちよく働けるための環境を整えていることは新鮮でした。ここで言う対話とは、「価値観のキャッチボール」を意味しています。

佐野日本大学
中等教育学校
早瀬 あみ

日本の中にも、少数民族や在日外国人がいて、多様な民族や価値観が存在しています。こうしたマイノリティーの中に、周囲の無知や無関心、偏見からつらい思いをしている人がいます。上手なキャッチボールを行うため、まず日本への深い理解が必要です。それが基準ともいうべき尺度となり、多民族・多文化への理解が進みます。また互いの文化などの「違い」に敏感になり、また「違い」を歓迎・尊重することで円滑な対話ができるようになるはずです。

提言「日本を世界に発信するためコミュニケーション能力を高めよう」

京都市立堀川高校
上原 朋子

「日本人のアイデアはとても良い。けれど、そのアイデアを発信する力が足りない」――。探検隊ツアーで出会ったマレーシア人に言われた言葉を、私たちは重く受け止めました。

渋谷教育学園
幕張高校
笹川 都

白黒をはっきりさせず、和を尊ぶ日本人の美徳は、世界基準では通用しないという現実を知るべきです。コミュニケーション能力を高めるため、学校でディスカッションなどして、相手を説得できる力を意識して養成する必要があります。

シンガポールやマレーシアでは、英語、中国語、マレー語など多言語を使いこなす人々に出会いました。言葉は発信力の基礎です。相手の文化を知る重要な窓口です。異文化を理解するには、まず日本の文化や歴史を学ぶ必要があります。身近な歴史遺産、文化に触れ、小さなことですが、浴衣や着物を着てお祭りや初詣に行くなど、できることを積み重ねることで教養が高まり、財産となるはずです。

講評

国際協力に関心を

添谷芳秀・慶応大教授

インドネシアでは、三菱商事と韓国ガス公社が共同でLNG開発に取り組んでいる。世界のLNGの50%以上を輸入する日本と韓国が相互補完的に協力している良い例だ。第三国での、日本と他の国との協力のあり方へも関心を広げてほしい。

日本見つめ直して

ピーター・フランクル氏（数学者・大道芸人）

海外に行くことの一番の意義は「日本を見つめ直す」ということだ。外国のことを知ることも大切だが、それを帰国後にいかして、自分の国を良くすることがより大事。今回の経験をそのきっかけにしてほしい。

海底は日本が主導

秦野るり子・読売新聞調査研究本部主任研究員

原油価格の急落が世界を揺るがす中で、エネルギーに関する提言はタイムリーだ。海底資源にも触れているが、日本の管轄海域の広さは世界6位であり、指摘されている「開発で主導権を」という心意気は大切でしょう。

トピックス

高円宮杯弁論大会の入賞者
充実の留学体験 2週間英語を特訓

高円宮杯全日本中学校英語弁論大会は、「将来の日本を担う国際性豊かな青少年を育てよう」と1949年に創設された。学校内の予選も含めると、毎年数万人の中学生が参加し、戦後の教育史に大きな足跡を残してきた。

近年は、三菱商事による上位入賞者の英国短期留学制度が創設されるなど充実を増している。65回（2013年）の入賞者3人は「ティーン特派員」として、英国南部イーストサセックス州のブランプトン・カレッジで2週間、英語特訓プログラムに参加、英語力に磨きをかけた。

ブランプトン・カレッジの関係者らと記念撮影する入賞者（左から2人目・4人目、右から3人目）

主催：読売新聞社　特別協賛：三菱商事　後援：外務省、マレーシア大使館

提言の全文はヨミウリ・オンラインに掲載しています
http://www.yomiuri.co.jp/teen/labo/reporter/